

# 役小角と修験道

法務課 五頭 覚玄

1

高尾山の一号路を歩き  
浄心門をくぐると、すぐ  
左手に神変堂があります。  
ここに祀られているのが  
役小角であります。

たいと思います。  
『続日本紀』は日本で  
公式に編纂された歴史書  
であり、役小角について  
記された最も古い文献で  
す。

役小角とは、修験道の  
始祖として仮託された伝  
説上の人物であり、神変  
大菩薩や役行者とも呼ば  
れております。鎌倉時代  
修験道において、始祖を  
誰にするかが問題となっ  
ていました。そこで、名  
を上げられたのが、役小  
角であります。  
金峯や熊野、さらには  
大峯を修行場とした山伏  
や修験者達は、『続日本  
紀』巻一に登場する葛城  
の宗教者であった役小角  
を修験道の始祖に仮託し  
ました。

そこで、今回から役小  
角について書かれた文献  
の関わりを紹介していき  
ます。  
『続日本紀』には以下  
のように記されておりま  
す。



神変堂に祀られる役小角

「役小角伊豆に流さ  
れる。初め小角葛城山に  
住みて、呪術を以て称め  
られる。外従五位下韓國  
連広足が師なりき、後に  
その能を書ひて、讒づる  
に妖惑を以てせり。故、  
遠き処に配さる。世相伝  
えて云はく、『小角能く  
鬼神を使役して、水を汲  
み薪を採らしむ。若し命  
を用いずは、呪を以て縛  
る。』」

現代訳では以下のよう  
になります。

「役小角、伊豆大島に  
配流された。初め役小角  
は葛城山に住み、呪術を  
よく使うので有名であつ  
た。弟子であつた外従五  
位下韓國連広足は役小角  
を師として仰いでいたが、  
後に師を妬み、妖術で人

を惑わしている  
と嘘の報告をし  
た。そのため  
役小角は遠方の  
地に配流された  
のである。世間  
では次のように  
伝わった。『役小  
角は鬼神を使役  
して、水を汲ませ薪を採  
らせたりし、もし鬼神が  
命令に従わなければ、呪  
術をもって束縛した』と。

役小角とは、役行者  
の氏名であります。役  
は氏であり、君は公とも  
書いて姓であります。役  
小角は普通、「オズヌ」  
または、「オズノ」と呼  
ばれています。これが  
正しいとは言いがけず、  
「オスミ」または、「コ  
スミ」とも呼ばれており  
ます。

また、役小角が住んで  
いた葛城山は、今の大阪  
府と奈良県にまたがる金  
剛・葛城山系のことであ  
ります。  
役小角を嘘の報告で陥  
れた韓國連広足は、韓國  
という氏から朝鮮から渡

来してきたと想像されや  
すいですが、本来は豪族  
である物部氏の系統で、  
物部韓國連広足とも書か  
れております。(帰化人  
という説もあり)先祖が  
朝鮮半島南部の三韓(馬  
韓・弁韓・辰韓)に使節  
として派遣され、功績が  
あつた為に、韓國の姓を  
受け賜つたとされます。

つまり、『続日本紀』  
の記述を要約すれば、「役  
小角は葛城の地域に住み、  
呪術を用いて鬼神を使役  
し、その後、韓國連広足  
の嘘の報告により、民衆  
を惑わした罪で伊豆大島  
に遠流された」という事  
になります。

役小角に関する正史の  
記述は、これだけであり  
ます。したがって後に書  
かれる役小角の説話や伝  
記は、この『続日本紀』  
を基に書かれているので  
す。  
次回以降、その後に書  
かれた伝記類から役小角  
と修験道にまつわる話を  
紹介していきたいと思ひ  
ます。

## 真言宗智山派管長 総本山智積院化主 第七十二世 大僧正 小峰一允 猊下 晋山式

去る十一月五日、汗ば  
むような秋晴れのもと、  
総本山智積院に於いて、  
真言宗智山派管長、総本  
山智積院化主第七十一世  
大僧正小峰一允 猊下の、  
晋山式が厳粛に執り行わ  
れました。

去る十一月五日、汗ば  
むような秋晴れのもと、  
総本山智積院に於いて、  
真言宗智山派管長、総本  
山智積院化主第七十一世  
大僧正小峰一允 猊下の、  
晋山式が厳粛に執り行わ  
れました。



晋山式に列座された諸大徳の皆様



輿にお乗りになられた小峰一允 猊下

い、法流相承の儀が行  
われ、小峰 猊下は前化主  
寺田信秀大僧正より猊座  
を受け継がれました。  
引き続き金堂に於いて  
行われた晋山傳燈奉告法  
要では、成田山、川崎大  
師の御両山の御貫首と並  
び、當山大山貫首をはじめ、  
真言宗各派管長 猊下、  
宗派諸大徳、関係者ら約  
五百名が見守る中、傳燈  
奉告文が奉読されました。  
法要後、総本山智積院  
近くのハイアットトリージ  
エンシー京で行われた  
祝宴では、成田山・橋本  
照稔御貫首のご祝辞に続  
いて、當山大山貫首の声  
高らかな乾杯のご発声に  
よって、盛大に開催されま  
した。

## 大山御貫首と秋の京都を訪れる

去る十月二十六日と二十七日の二日間、葉王院の  
総代・参与十三名と、大山御貫首、飯沢執事、その  
他随員四名の総勢十九名が、秋深まる京都へ研修に  
行つて参りました。

初日は古都・京都の文化財として、世界遺産に登  
録されている、真言宗醍醐派・総本山醍醐寺を訪れ、  
豊臣秀吉公ゆかりの庭園・書院・五重塔・金堂等を  
拝観しました。また、高尾山中興・俊源大徳は、永  
和年間(一三七五〜七八)に醍醐寺から入山された  
と伝わっております。

二日目は、高尾山が属する真言宗智山派の総本山  
智積院を訪れ、大書院・宸殿・講堂等を拝観して、  
長谷川等伯一門の手による障壁画などを見学しまし  
た。その後、葉先が色付き始めた嵐山周辺を散策し、  
無事に帰山しました。

役員の皆様も、初めて醍醐寺と智積院を訪れた方  
が大勢おり、「改めて信仰を深める機会となった。」  
とお話されておりました。



醍醐寺五重塔前にて大山御貫首と記念撮影